

狂言 茶壺

解説

今村嘉太郎

スツパ
中国の者
目代
後見

野村万禄
吉住講
吉良博靖
杉山俊広

能 鞍馬天狗

(休憩 二十分)

山伏・天狗
僧
牛若丸
稚児

今村嘉太郎
御厨誠吾
南潤之助
長江圭大
江藤巨輝
今村雛子
杉原遼大
西麻央
武藤陽華
武藤颯馬
宮崎凜
武藤ひかり
野村万禄
吉住講

能力
木葉天狗

笛
小鼓
大鼓
太鼓

相原一彦
大倉源次郎 (人間国宝)
白坂信行
田中達

後見
多
久
島
法
子
今
村
嘉
伸

地謡

笠田祐樹
今村哲朗
大西礼久
今村一夫
久保誠一郎

狂言 茶壺

あらすじ

茶好きの主人の命により梅ノ尾へ買い付けに出掛けた男は、帰路立ち寄った宿場で酔い潰れ、茶壺を背負ったまま道端で寝込んでしまっています。そこへ通りかかった徒者(素つ破)が、これ幸いと近づき肩紐に手をかけ、目覚めた男に自分の物だと主張して……

みどころ

詐欺師が近付き所有権を云い争う演目は、「狂言「長光」」にも見られませんが、本曲は所有者ならではの情報を、止めに入った代官(目代)の前で身振り手振りの仕方話で説明する男と、それを盗み見て真似る素つ破の駆け引きが見どころとなっています。さて目代の裁きは如何に。

能 鞍馬天狗

あらすじ



春の京都、鞍馬山。ひとりの山伏が、花見の宴のあることを聞きつけ、見物に行きます。稚児を伴った鞍馬寺の僧たちが、花見の宴を楽しんでいると、その場在先の山伏が居合わせたことがわかります。場違いな者の同席を嫌がった僧たちは、ひとりの稚児を残して去ります。

みどころ

に満ちた堂々たる姿を現します。大天狗は、牛若丸の態度を褒め、同じように師匠に誠心誠意仕え、兵法の奥義を伝授された、漢の張良(ちようりょう)の故事を語り聞かせます。そして兵法の秘伝を残りなく伝えると、牛若丸に別れを告げます。袂に縋る牛若丸に、将来の平家一門との戦いで必ず力になろうと約束し、大天狗は、夕闇の鞍馬山を翔け、飛び去ります。

僧たちの狭量さを嘆く山伏に、その稚児が優しく声をかけてきました。華やかな稚児に恋心を抱いた山伏は、稚児が源義朝の子、沙那王「牛若丸」であると察します。ほかの稚児は皆、今を時めく平家一門で大事にされ、自分はないがしろにされているという牛若丸に、山伏は同情を禁じ得ません。近隣の花見の名所を見せるなどして、牛若丸を慰めます。その後、山伏は鞍馬山の犬天狗であると正体を明かし、兵法を伝授するゆえ、驕る平家を滅ぼすよう勧め、再会を約束して、姿を消します。

大天狗のもと武芸に励む牛若丸は、師匠の許しがないからと、木の葉天狗との立ち合いを思い留まります。そこに大天狗が威厳

源義経の幼少時代を題材にした物語です。花盛りの鞍馬山を背景に、威厳ある大天狗と華やかな牛若丸との師弟の絆を中心に、情趣に富んだ多彩な場面が展開されます。前半では、大勢の可憐な稚児の登場あり、寺男の小舞あり、高僧のお高くとまった物言いありと、盛りだくさんの話を経て、大天狗の化身である武骨な山伏と、孤独な牛若丸との心の交流に至り、どこか詩情を誘う深山の、彩り深い雰囲気醸し出されます。後半には、大天狗のもと兵法を学ぶ牛若丸の、殊勝な心がけに焦点があてられます。牛若丸は師匠を大事にする、凛々しく素直な少年として描かれ、鞍馬の大天狗は、天狗たちの頭領とも目されるような、堂々たる威厳ある姿を現します。

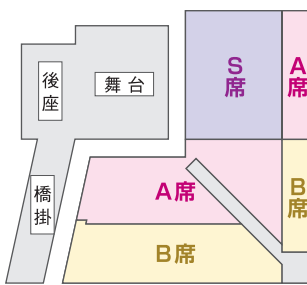
the能ドットコムより

住吉楽祭 ~春の佳き日に~能と茶の湯

江戸初期には、将軍、藩主が家来の家を訪問した際、茶の湯でもてなしその後能の席で接待することが行われていました。茶の湯の心理「わび」、能の本旨「幽玄」を体感していただける本日だけの特別茶席です。

遠州流 遠州流茶道は、江戸時代初期の大名茶人で総合芸術家として有名な小堀遠州を流祖とする日本を代表する大名茶道で、流祖以来440年の歴史を持ち格式ある茶道として、今日まで受け継がれています。遠州流茶道の真髄は「綺麗さび」と称され「わび・さび」の精神に、美しさ、明るさ、豊かさを加え誰からも美しいと云われる客観性の美、調和の美を創り上げたことにあります。

■座席図



交通アクセス

- JR博多駅・地下鉄博多駅より徒歩約10分
- 西鉄バス「住吉」下車、徒歩約2分

駐車場のご案内

収容台数：約50台